あさ 3

2016

版画　武井石艸

道幅に余る大きさに春落日　　堀内一郎
桜咲き二人の手話が運ぶ夕日

春禽を下げて下り来る日の方ゆ　　佐藤喜孝
ぶらんこをぎしぎしゆする十九才

（昭和 38 年 4 月　水音）

あと

三　月

富士ひとつ上總下總初霞

三ヶ日すし屋が走る水戸街道

父の知らぬ家に暮して粥柱

湯ざましはひよわなる水初雀

歩きつつ鳴きつつ猫が冬の朝

暮して

佐藤喜孝

庭猫

泉

木枯や夜更けに呼べば猫の鳴く

病む猫の厳寒の夜は総毛立ち

川

老猫に命終迫る冬の雨

秋

老猫の今はの時を雪の降る

花枇杷やまなことづれば猫浮かぶ

蠟梅の藹たけた香の路地へ出づ
音たかき音無川やおぼろ月
野良めぐる本家の爺や水温む
世話やきの姉ちゃんに随きレンゲ摘
フリースへ佳き風やなぎ青める日

☆

石動
上井

青い鳥

江幸
日向
大

ひひらぎを好み啄む青い鳥
冬帽子似合ってをりぬ猫駅長
春めくや臍のピアスの煌煌と
G線上のリベラタンゴや外は雪
強北風に顔真っ直ぐと友来る

歳時記を開きしままに年用意
爪立ちて一番風呂に寒の入
鹿児島に除雪車走る日曜日
再度奮起治験同意書春隣
梅咲くや夫と歩みし年重ね

☆

子裕藤斉

霜柱

子恭藤佐

元朝やあをあをと湧く寺井かな
燃え染めし心の中に葉鶏頭
躓きて空気の柱輝の手で
防犯カメラ見上げ迂回の雪女
霜柱胸の高さで手を振りて

初座敷壺の花々凛と立つ
初春や出づる大皿柿右衛門
わらんべにとらす接待キャラ歌留多
松明けて隣人転居風去来
初夢や子規漱石の門下生

初夢

七郎衛門吉保

ちんどん屋

篠田純子

ジングルベルのアレンジはジャズちんどん屋
裃に夏帽子なりちんどん屋
枯草踏む音すずめ鳩カラスひと
夢の中でモロー反射す風邪の熱
家庭内にそれぞれ巣穴春を待つ

初日いま力かぎりに子のあくび
立ちづめの馬にし眠る雪が霏々
寒行僧先を歩めり追ひつきさう
外燈を迂回深夜の雪女
帽子脱げば寒の青空かぶさりく

帽子

定梶じょう

申年

須賀敏子

真夜中のコンビニへ行く雪女郎
新築の子育て家族春隣
福詣人形焼を土産とし
嶺眩し転ばぬやうに初スキー
ポッキリと肋骨折れて小正月

思へらく賽の河原の蕗の薹
顔ふたつ川中島の飾り凧
はらからの誰から狂ふ雪解川
江戸へ七里通船堀の堤焼く
海に出る川の一念雪解風初鏡

川子
竹内弘

初鏡

田中藤穂

初鏡素朴なる性子もつぎて
大破魔矢鈴の音高く授けられ
葉牡丹の渦に日の差す閻魔寺
お迎えは明日かも知れぬ鮟鱇鍋
探梅の先づお隣の白梅を

朝より日の差す庭も淑気かな
慎ましく老いを装ふ初詣
数の子を取りてはづむや豆皿に
初場所や落着かぬ祖父思ひ出す
衰へをおぎなふ気力お正月

長崎桂子

新年

冬の蠅

森理和

電車の中を行ったり来たり冬の蠅
蜜柑より林檎欲しがる幼き子
卓上で綿毛に変はる野辺の花
歳下の従兄弟を葬り枯葉踏む
真っ赤っかミラクルフルーツ頂戴し

年の差の程良く集ふ初句会

二才児のシャッター押すとお正月

去年今年長湯も母に似てきたり

去年今年季語と花の名少しづつ

悪き夢見ぬ流感や有難き

初句会

赤座典子

二月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

門付が春のをしえへを賣りにくる　佐藤喜孝

門付とは意を異にしますが、この句に佃の盆うたを思い出しました。「人も草木も盛りが花よ」に始まり、秋の七草を唄います。「秋の野分は無常の風よ散れば残らず皆土となる」盆うたの「をしへ」は、「今を一生懸命生きなさい」と言う事なのでしょう。（純子）

ただいまとマスクをはづすお父さん　赤座典子

「パパの声だ！」と認識されても、「マスクのパパ」と言われたくはありません。マスクを外してニコニコしているお父さん。お父さんが帰ってくると、家中の皆んなもほっとしてニコニコ顔になります。ウィルスを持ち込まない、衛生的なお父さんです。（純子）

鰭酒に身ぶるいしたる好々爺　秋川泉

好々爺が鰭酒を前にして、嬉しさのあまり身震いをしているのでしょう。私は鰭酒の熱さへの期待と、呑む人の冷えた体温との温度差による、身震いであると、解釈しました。「雪暮夜入谷畦道」（ゆきのゆうべいりやのあぜみち）と言う歌舞伎で「直侍」が蕎麦屋で熱燗を待つ間に、股火鉢をしますがやはり身震いをします。泉さんの句は視覚の他にも、温度差と言う科学的なものを突いていて、新鮮に感じました。（純子）

塩鮭の吊るされし目は宙にあり　秋川泉

塩鮭はもしかして干鮭のことではないのか。

昨年末、近々と新巻鮭を見た。もう生きてはゐないと思っても炯々とした眼光は生身の鮭より凄みがあった。その眼が見上ぐる宙に在ることに心を動かされての一句。素直な表現である。（喜孝）

赫々と囲炉裏の炭や父子の爐　井上石動

囲炉裏端に、今も蛇笏、龍太の魂が存在しています。山盧を訪れた時の、作者の感動の伝わる一句と鑑賞いたしました。（純子）

後山かな根深く立てる冬欅　井上石動

蛇笏・龍太を訪ねたをりの作品。山盧の裏山を盧主は後山と称した。「後山かな」は、漢語の重み、そして切字かなと相まって、作者の感動を余すところ無く表現されてゐる。冬の欅は常にも増して幹の存在感があらはれる。抱へられぬほどの太い幹であらう。その欅の根に想ひをはせる作者。感動の深さを思ふ。（喜孝）

晦日や畳目に沿ひ拭掃除　大日向幸江

古新聞紙を湿らせ千切ったり、茶殻を撒いたり。はたきは上のほうから、箒も雑巾も畳目に沿って！今だに厳しい、躾の声が聞こえます。でもその通りに拭き掃除をなさった作者なのです。きっと清々しい新年を迎えられたことでしょう。（純子）

尾の先で返事する猫小春の日　斉藤裕子

ほとんどの猫は、人語を解釈していると、私は思っています。ウトウトしている時に社交辞令に尻尾を振って「聞いてますよ」との反応。ところが「お医者さんに、行くわよ！」と言うと脱兎のごとく（猫なのに）逃げだします。ツンデレの猫に振り回されるのが、猫好きなのでしょうか。（純子）

北風や木々のうしろの虚言癖　佐藤恭子

人に弱い所はみせない、弱音は吐かない。虚言とは意味が違いますが、「だいじょうぶ、平気よ」と、いつも強気の作者ならではの句と鑑賞いたしました。（純子）

行く年や句と遊ぶメモ枕元　七郎衛門吉保

こう言う句が好きです。「三段切れですが」とか、言われようと気にすることはありません。型にはまると自分らしさが失せます。俳句を作る事が楽しくて仕方がない作者のようです。できれば、メモの他にも鉛筆を、お忘れになりませんように。（純子）

画家とモデル画展にをりて冬温し　七郎衛門吉保

「画家とモデル」の画題でピカソやマチスの作品がある。画面にはゴツい画家と女性のモデルが描かれてゐる。掲句のモデルも女性、画家は男性の組合せが面白い。ピカソの絵とは違ひ絵にはモデルしか描かれてゐないやうだ。たまたま訪れた時そのモデルと画家が展覧会場にをられたといふ。〝冬温し〟として見事な個展への挨拶句にもなってゐる。（喜孝）

だうしたやら深き傷ある木の槇槌　篠田純子

槇槌の深傷をだうして生じたのかと案じてゐる。槇槌は傷つきやすいがそれも枝葉と擦れあったり、落下の際に傷つくことが大半、と作者は思ってゐる。しかし木にぶら下がってゐる槇槌の実が深傷を負っているのである。本当に

だいしたやらである。（喜孝）

湯どうふはもめんが好きで山に雪　定梶じょう

「命の果てのうすあかり」から察すると、久保田万太郎の湯豆腐は、絹ごしだったのでしょうか？じょうさんは木綿ごしの湯豆腐がお好みとのこと。寒冷の地で力強く生きるのには、しっかり食べごたえのある木綿ごしなのですね。（純子）

ポケットのなくて手が暇日向ぼこ　定梶じょう

ある歌手がテレビで唄ふ姿が気になる。両手を大袈裟に振るのだが全く同じパターンなのである。この歌手が出てくるとチャンネルを変へてしまふ。作者も手の扱ひに困惑してゐるやうだ。ポケットに手を入れたからといって特別な作業をするわけではない。同じやうに暇なのだが外から見れば様になるのだがと作者は思ふ。しかしポケットがない。と、日向ぼこで手の処置にちょっと困ってゐる作者がゐる。（喜孝）

もう五年夢追ひかけよ日記かふ　須賀敏子

作者は、五年日記を書い求めました。素敵な事とおもいました。しかも、夢を書き込もうと言うのです。良い夢、良い事実が書き込まれることでしょう。（純子）

しぐれ忌の灯にいきいきと諍はん　竹内弘子

格好いい句だなぁと、思いました。「本日は、芭蕉の命日なり、いきいきと諍はん、諸君！」車座になり、志の高い人達が句会を始めようとしています。（純子）

句会後の酒席では、句会の緊張感から解放され話が弾む。しかしこのやうな席であっても作者は話しに加わるといふ印象がない。しかし時

に、いふときははっきり云ふ江戸っ子である。掲句の作者は全く正反対のすがたでゐる。作者を知る者にこの落差をほほゑましく思ふ。（喜孝）

浮雲や姑と白菜漬けしこと　田中藤穂

「白菜は十字に包丁をすこし入れてから、指を入れて割りさくのよ。隙間なく一段目を並べたら、粗塩を少し多めに振ってね。水が上がらないと大変なのよ。」作者は、冷たくて、赤くなった手で、さいごに石を載せます。重石が効いているかしゃがみ込んで入念に確認します。「とにかく、水が上がらないと大変なのよ。」お姑さんの一方的な会話が聞こえてくる一句でした。（純子）

冬薔薇園色と香りに徘徊る　長崎桂子

真紅、ピンク、黄色と薔薇園は冬にもかかわらず、上手に大輪の花を咲かせています。「素晴らしいわ」と目移りしてしまいます。「あら、いいかおり！」すっかり落ち着きを失ってしまっている作者が見えるようです。（純子）

蠟梅や今年は伯母の十三回忌　森理和

蠟梅がお好きな方だったのでしょうか。それともいつも良い香りのする、素敵な伯母上だったのでしょうか。亡くなられても、姪御さんに思い出される幸せな方、と思いました。（純子）

みかん熟る蜜柑畑はみかん色　森理和

実の熟れたみかん畑の様子が生き生きと、おもしろく描かれてゐる。「蜜柑」を一句に三回も出てくる句はあったのであらうか。なんとも自由な表現で、邪気のない子供の絵を見るやうで楽しい。（喜孝）

前月抄

十二月八日と思ふ晝すぎに　佐藤喜孝

ただいまとマスクをはづすお父さん　赤座典子

塩鮭の吊るされし目は宙にあり　秋川　泉

後山かな根深く立てる冬欅　井上石動

俸給の有りし日懐かし師走かな　大日向幸江

卵酒布団の中で読む句集　斉藤裕子

北風や木々のうしろの虚言癖　佐藤恭子

画家とモデル画展にをりて冬温し　七郎衛門吉保

だうしたやら深き傷ある木の榠樝　篠田純子

ポケットのなくて手が暇日向ぼこ　定梶じょう

家出犬首輪しっかり柚子は黄に　須賀敏子

しぐれ忌の灯にいきいきと諍はん　竹内弘子

いま置きしものを探して日の短　田中藤穂

構はずに信号過ぎる枯葉かな　長崎桂子

みかん熟る蜜柑畑はみかん色　森　理和

喜孝　抄

ホトトギス　二月号

絶対に踏まぬ絵踏といへざりし　稲畑　汀子
楢桂欅従へ梅白し　稲畑廣太郎

沖　二月号

そもそもは煤逃げなりし千葉笑　能村　研三

雨月　二月号

沼杉の実の大きさを讃へ合ふ　大橋　晄

槐　二月号

王朝の屏風の裏のすだまかな　高橋　将夫

馬酔木　二月号

冬柏老い諾へば生き易し　徳田千鶴子

風土　二月号

仏壇の奥の金色二月かな　神蔵　器

京鹿子　二月号

我が背に千の留目年迎ふ　鈴鹿　呂仁

六花　二月号

山水の飛び出せるまま氷りたる　山田　六甲

鴫　二月号

冬の日をたつぷりに石閉づるなり　井上　信子
はるかなる時を縮めておでん鍋　高橋　道子

万象　二月号

紅葉して桜の幹は紫に　大坪　景章

春燈　二月号

貼り替へし障子明りに母のこゑ　安立　公彦

峰　二月号

土臭きサッカー少年寒戻る　布川　直幸

末黒野　二月号

小春日や駅を通過の貨車数ふ　小川　玉泉
紅葉づるや滝離れても滝の音　松本三千夫

面　一一九号

空あります二百十日の駐車場　高橋　龍

船団　一〇七号

夕焼けの中のフジツボ愛好会　坪内　稔典

集　五七号

人無くて鳴る梵鐘や花楓　大山　夏子

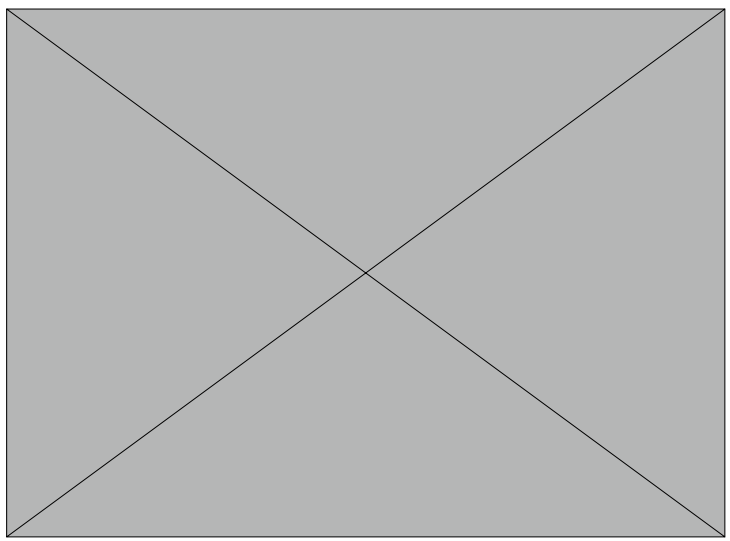
朝　二月号

ゆふぞらは雪の白さや桜の芽　岡本　眸

俳句通信　九〇号

一人づつ十人泥鰌掘りてをり　今瀬　剛一
山茶花のがやがやと咲く日向なり
やや寒のふつうに寒いより寒し　後藤　立夫
寒くとも御慶あたたかなりにけり

佐藤喜孝　抄



俳境流連

今はむかしチッキに木札あたたかし　じょう

正確には「託送手荷物」というらしいが、航空便では今でもその制度がある。

旧国鉄の「チッキ」は、調べてみると、一九八六年に廃止され、翌年、国鉄本体の分割・民営化が実行されていて、「チッキ」の廃止と民営化に関りがあるのか否か知りませんが、懐かしい制度ではありました。

昭和三四年初上京の時、布団袋の結い方を教えてくれたのは十三歳年上の次兄でした。今言うワイン・カテーのズック地の袋。上面にロープの結び目が菱形になるように縛るわけですが、その面に木札を荷札として結びつける。荷造りを終えて、何となくおとなになったような、誇らしい気持ちになったのでした。そしてほぼ七年後、東京を引きはらって帰郷することになった時。布団袋の縛り方の一切が忘却のかなたに。多分、ダンボール函が現在のように自在に手に入る時代ではなかったのでしょう。

そんな話を一度娘にしたら、それほど近年まで「木簡」が使われていたんだ、と言われてやれやれ、と思ったのでした。

鳥籠を購って貰ひし雀の子　喜　孝

巣から落ちた烏や雀の話題が春になると聞かれる。わが家でも巣から落ちた雀をしかたなく飼ったことがあった。餌もない知恵を絞ってあげたが食べてくれない。水もなかなか飲まない。しばらく紙箱に入れていたが〈鳥籠を購つて貰ひし雀の子〉といふことに相成った。この雀は耳さとく外で雀の声がすると背筋を正し聞き耳をたてる。鳴いてみることもあった。食事の時は鳥籠から掴みだし餌をあげる。

その後運動にと手から放してあげる。しばらくばたばた飛んでハアハアして休む。夏の猛暑も越し秋になったが、痩せた体はいかんともしがたい。放鳥するには心もとない。と逡巡するうちに冬となった。神田生れのこの雀は名前も付けてもらえず冬を越すことはなかった。ときどき掌の中にゐた雀の感触を思ひ出す。いまはケーキ屋「傳」の前にある楓の根元の大きな石の陰に眠ってゐる。

水中花昨日けふまた明日かな　恭　子

明日の事は何が起るか解らないよと、よく人に言われたことがあった。

父ちゃんの頬の耳の下あたりにミミズ腫れのような傷があった。どうしたのかなと思っていても小さい頃は何故だか聞けなかった。聞けないというか聞こうと思ってもみなかったというのが本当のことだ。だんだん大きくなり中学生の頃になったら、どうしても聞きたい思いに駆られた。戦争に行ったことは家に居なかったので微かながら知ってはいたが、面と向って聞くのは怖かった。しかし遂に聞いてみた。たいして氣にもすることなく話してくれた。役は上等兵で派兵されたのは中国だった。匍匐前進している時に弾がかすって行ったそうだ。何の感情もないように見えた。その時は淡淡と聞いていたように自分では思っていた。しかし今考えると恐ろしいことだ。

憲法第九条を世界遺産にと、喜んで署名をした。苦い思いが沢山あるので……。昨日思っていたことが又約束されていたことが、いつの間にか反故にされていくことが多くなった。今日から明日日本国憲法第九条の憲法改正など無いようにと祷るばかり。成人した時の選挙権取得？後の新鮮な思いは持続けていこうと思っている、命のある限り。それにつけても残念なのは、土井たか子さん。水中花の水は取替えてあげよう。

月明り赤児のまなこ黒水晶　七郎衛門吉保

「あを」発刊以来、切り紙カットや表紙写真や紀行文を通して、すなわち寄席席亭の色物と同様に、主題である俳句以外で、紙面に色を添える役割を持たせていただいておりました。

一昨年十一月にあを吟行が日比谷公園で催された折りも、和服の男性が参加することで吟行に色を添えるので、とのお誘いがありご一緒しました。

恭子さん喜孝さん以外の方とは初対面でしたが、皆さんが傳句会のメンバーでした。「傳には男性が少なく、さらに着物姿は会場の色添へにぴったり」との強力な誘いに乗ってしまい、昨年一月から参加したのが句作りの始まりです。

月一の句会に合わせ、五句を事前に準備しての参加が続いていましたが、七月の会から席題が出されるようになりました。月に五句の世界から三十分に一句の世界に投げ出されて、三回目の九月の席題が「目」でした。当日のノートには、目・まなこ・目を細め・赤子の・秋の子や・名月や・月見れば・黒水晶などのキーワードが残っています。

末枯やモノクロ映画浮び消ゆ　桂　子

先達て、女優の原節子さんが亡くなっていらっしゃったとのニュースが流れました。

私の若い頃の楽しみは友達と映画館へ行くことでした。当時はカラー映画が未だまだ少なくて、今も話題になり優秀と評判の作品は殆ど、白黒映画だったと思います。

あの原節子さんの美貌を最初に見る事が出来たのも、白黒映画であった様に覚えて居ります。（記憶は確かではありません）

此の句は何時の作品だったか、もう十年以上は前の作であったと思います。

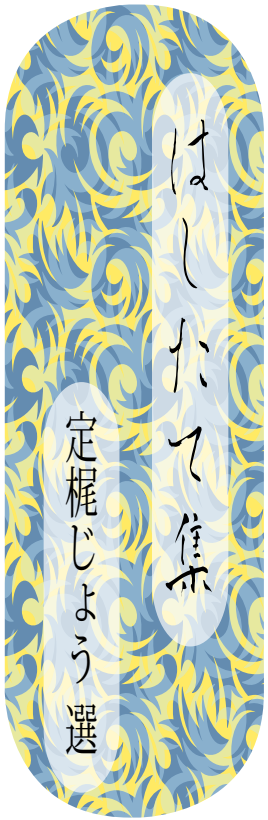
隣家の植込みの所所が枯れ始めて灰色に、又はうす枯色、それと苔むした幹に、落日の早い季節はわずかの時間で暗くなり、なんとも物悲しい気持になった時に、何故かモノクロ映画の悲運な筋書が、二つ三つ浮んで来ました。それ以外に、チャップリンの少しばかり悲しくて、面白く楽しい映画も思い出し、浮んで消えました。

元日や猫の寝息のまろきこと　恭　子

あの三月十一日の大怪我で帰宅のアリは、それ以後外に出していない。又怪我でもしたらと思い、玄関のドアの処で後ろを振り返り一声「にゃあ」と。其れも無視。

苦い思いがあるのでそう猫の言うことは聞いてあげられないぞ、と。先日ふとしたドアの開け閉めが上手くいかず、隙をかいくぐって外に飛びだした。前の私道を十歩程行った時、慌てた私を尻目に一目散に空いていたドアに走り込み二階まで上がっていった。

何のことはない、暖かい所にいたので外の寒さが一瞬身にしみたのだろうか。恐ろしかったのかもしれない。私の片腕は、毎夜アリの枕になっている。寝る時は炬燵の中にいてもいつの間にか寝ている私の肩を左前足でチョンチョンと合図。毎晩の如くの事。寝られない時でも猫の体温でいつの間にか熟睡。優しい心持ちになれる毎日。いいものだなあ、穏やかな一日が始まる。



赤座典子

初茶湯やはらかき脳あらまほし
松明や猿を決め込むこと勿れ
平らかでなき世でありぬ独楽澄める
日面やどこにも見えぬ雪達磨
流感に収束の見ゆ水甘し

初茶湯やはらかき脳あらまほし

私、茶の湯のことは詳しくありませんので、「やわらかい脳があったらなあ」と嘆くが如き措

辞と茶の湯のとり合せがいま一つつかみ兼ねるのですが、そういうこともあるんだろう、程度の理解で以下の文章をつづります。

漢字「脳」そのものに「やわらかい」の意味が含まれているそうで、辞書『漢字源』には「脳みその柔らかい特質に着目した命名だろう」とあります。ですから、「やはらかき脳」は上手にことばをつないでいるわけです。しかし結句の「あらまほし」が今ひとつ。突然純正な古語が出てきて、一句の中で突出してしまっている。ここは、同じ古語の「欲りする」を遣い、助詞「も」をくっつけて、

初茶湯やはらかき脳欲りするも

結句を曖昧にするわけです。

松明や猿を決め込むこと勿れ

この「猿」は三猿のことなんでしょうか。そうなら

松明や三猿決め込むこと勿れ

とした方が読み手に親切では、と思います。

平らかでなき世でありぬ独楽澄める

「なき世」「でありぬ」がいささかまずい。

平らかでない世なりけり独楽澄める

なにしろ「独楽澄める」がうまいのです。

流感に収束の見ゆ水甘し

「収束の見ゆ」。「見ゆ」ではっきり切れてしまうわけです。

流感に収束見ゆる水甘し

「見ゆる水甘し」として、切れているような切れていないような。先の句の時にも言いましたが、「曖昧にする」ことも俳句の味なのです。「収束」とありますので世間一般は無論のこと作者御自身も風邪引き。水が甘い、と感じた時が病いの癒えた時なのです。

佐藤恭子

林檎あかい原発嫌ひ今日はさむい
軍艦が右脳にすみて早三月
バッカスと酌んで原発だうにかせん
偶や恋猫犬を追ひはらふ

林檎あかい原発嫌い今日はさむい

中七、座五だけでしたら付き過ぎの一句、となる処。「林檎あかい」で一句が生きた。

軍艦が右脳にすみて早三月

右脳は、図形や音楽の認知をつかさどるんだそうです。対して左脳は言葉、文字などの情報

処理を行う、といいます。軍艦が左脳にあるのなら言葉「軍艦」の情報に関わって「左脳にすむ」と言ってよろしいのですが、「右脳にすみて」だと言う。この違和感を求めての上五中七なのでしょう。

そして「もう三月になった」と慨嘆する。作者は、待春よりもミリタリズムを恐れているのでしょうか。

バッカスと酌んで原発だうにかせん

バッカスは酒の神であるとともに音楽の神。歓楽のなかにあつても「原子力」のことが脳裏をはなれない。

偶や恋猫犬を追ひはらふ

中七「恋猫が犬追ひはらふ」とした方が。

田中藤穂

わが内の邪を打つと受く大破魔矢
寒行の太鼓が闇を震はせ来
赤葱を買ふ深川のお縁日
繭玉へ子を抱き上げて触れさせて
手を出せと大きな柚子の黄を渡す

わが内の邪を打つと受く大破魔矢

「(邪を) 打つと受く」、動詞の連続がやや煩わしい。

わが内の邪(よこしま)打つと大破魔矢

赤 葱 を 買 う 深 川 の お 縁 日

「赤葱」が何とも結構。

繭玉へ子を抱き上げて触れさせて

「繭玉や。」と切りたい。

手を出せと大きな柚子の黄を渡す

上五がややぞんざい。また、「大きな柚子の黄」は「柚子の大きな黄」とした方が。「柚子の黄いろ」は当たり前にすぎる、ということです。

手のひらへ柚子の大きな黄を渡す

森　直子

目の前にチワワの顔や初詣
冬霞盃ほどの富士の影
読み初めのイザベラ・バード果敢なり
暖冬やお下げの分け目ｚｉｇｚａｇに

目の前にチワワの顔や初詣

現実の状景なんでしょうが、すかさず言い留めた。

冬霞盃ほどの富士の影

結語の「影」は当然「景」のこと。その景を盃に譬えること、私は初めてであいました。なるほど。まして冬霞の中とあればなおさら。

読み初めのイザベラ・バード果敢なり

イザベラの紀行文は多分、廿歳代に初見。明治初め頃の日本の、東西にわたり歩いた経験をもとに書かれた。他に朝鮮半島を歩いた文章もあった筈。私の読んだ昔は、確か古めかしい訳文だった。

とまア、こんな程度の記憶、知識しかないイザベラ・バードなのですが、「果敢なり」の措辞で、すこし内容がよみがえってきました。現代なら問題視されそうな描写が多々あって、文明の先進国ヨーロッパ、それも当時の最一等国イギリス人（だった筈）女性による文章ですから、現代の規範に合わせるわけにはいかない、ということなのでしょう。

暖冬やお下げの分け目ｚｉｇｚａｇに

お下げの分け目をｚｉｇｚａｇと把握して、さらに「暖冬」をとりあわせる。俳句に経験を積まなければ、こんな飛躍はできない。

なお、直子さんのハガキに、「はしたて」は能登の枕詞とのこと、の一文がありました。私

にとり残念なことに、「はしたての」を「能登にかかる枕ことば」と説明してくれている書物がありません。ただ、「地名〈熊来〉にかかる。かかり方未詳。」とはどの辞書にも説明してあります。「熊来」の地名をよみこんだ歌も二首、万葉にあり、現在の「七尾市中島町」に残っているのです。かつては「熊来の村」と言ったようです。

というわけですが、「はしたての」を能登の枕詞、ととっていただいて、有りがたい。

山荘優子

大空や規律正しき渡り鳥
鴨の陣はみ出し鴨の泳ぎぬて
冬霞刻の止まるる向う岸
雪催ひ遠き故郷に居るやうな

鴨の陣はみ出し鴨の泳ぎぬて

形を刈りこみたい。

はみ出しで一羽が泳ぐ鴨の陣

冬霞刻の止まるる向う岸

「止まる」の語は、「止まらず・止まりて・止まる時・止まれば」と変化して、「止まるる」。と

いう形がありません。

冬霞刻の止まれる向う岸

冬がすみの中、向う岸の時間が止まっているようだ、と。うまい。

雪催ひ遠き故郷に居るやうな

雪もよいの空に望郷の念。

王岩

捲り上ぐ暦の富士に淑気満つ
晴れ渡る異国の空や松の内
梅挿しで気高き主の心かな
嬌柳見兼ねる色と成にけり

捲り上ぐ暦の富士に淑気満つ

上五「捲り上ぐ」は「暦」にかかるわけですから、「捲り上ぐる」と連体形にすべき。しかし字余りになるわけですから、

捲り上げ暦の富士に淑気満つ

晴れ渡る異国の空や松の内

なるほど、王さんには異国なのでした。

梅挿しで気高き主の心かな

「ある方を訪ふ」と前書き。ただ、「気高き心」は詩歌にはちょつぴり手垢のつきかけた措辞。王先生に漢語の講釈をするようで気が咎めるのですが、

梅挿して典雅なこころ主かな

嬌柳見兼ねる色と成にけり

七草粥の頃の柳は（たおやなぎであっても）見るに堪えない色となっているのです。

森　理和

冬日受け雲より虹の小さく立つ
冬夕焼烏寝ぐらへ数十羽
祝ひ箸皆の揃うて匙二つ
田づくりの甘さ加減は上々に

冬日受け雲より虹の小さく立つ

虹は、日を受けて立つもの、です。あるいは「雲より」も不要かと。

日が射して冬の虹なり小さく立つ

「小さく立つ」が的確。

祝ひ箸皆の揃うて匙二つ

「祝い箸が揃った」とするよりも「揃へた」とする方が作者の動きが分りますし、匙にしても次のようにした方が。

祝ひ箸みんなに揃へ匙も二つ

田づくりの甘さ加減は上々に

句歌では、何かをつくって上手にできました、では面白くないのです。そんか時はむしろ、先にも言いましたが、曖昧にするのも一つの手。

田づくりの甘さ加減の然てもさても

秋川　泉

初護摩の焔盛んに大般若
福詣り風強き日を巡りけり
餅花の広がる座敷猫の居る
初大師海山に謝す今朝の膳

福詣り風強き日を巡りけり

座五「巡りけり」がありますので、上五を「七福神」、と。

篠田純子

歳末大売出し若きをんなのちんどん屋
ちんどん屋を追ひ他所の町時雨けり
冬の草古き口紅妙な味
走り根のぬめりと光り春を待つ

歳末大売出し若きをんなのちんどん屋

これもことばを刈り込みたい。

歳末の街妙齢のちんどん屋

ちんどん屋を追ひ他所の町時雨けり

上五の「を」は不要。「他所の町時雨けり」が秀逸。

因みに「時雨けり」。江戸期にはこういう表記がいくらもありましたが、現代「時雨れけり」と、送り仮名を附すべき、と思います。

田中藤穂

朝採りの土産夕餉のなめこ汁
マチュピチュをテレビに見つつ栗を剥く
武州古社石のうさぎに雨寒し
枯葉色のコートで犬む従へて

昨年十一月締めに行き違いがあって、今月号に掲載することになったようで、藤穂さんには申しわけないことでした。

朝採りの土産夕餉のなめこ汁

「夕餉」に余り意味はない、と思うのです。

朝採りの土産のなめこ汁なりけり

マチュピチュをテレビに見つつ栗を剥く

面白いとりあわせです。が、語順が当たりまえにすぎます。

マチュピチュがテレビに映る栗剥けり

武州古社石のうさぎに雨寒し

確かに私はこの石のうさぎを見ているのです。何処であったか記憶に上りませんが、寺社へ

行くのは吟行の時が殆んどですので、そんな折りだったか。いずれにしろ・上五「武州古社」の措辞がぴたっと坐っています。

大日向幸江

黄昏や真紅のドレスのシクラメン
人日や蓄へてあり缶蜜柑
初粥に芹やなずなやたっぷりと
駅に着く雪の匂ひの黒い貨車

初粥に芹やなずなやたっぷりと

俳句のなかの「に」は、大概「の」に替えても通ずることが多い。

初粥の芹やなづなやたっぷりと

駅に着く雪の匂ひの黒い貨車

「雪の匂ひ」の「黒い貨車」が「駅に着く」という。十全の措辞。感性を先行させ乍らしっかり物で押さえている。

七郎衛門吉保

暖冬に越後山々縞模様
冬小蜂刺すこともなく浮き止り
つんつんと頬叩く風冬の道
姿勢よく姿勢よくしろ寒梅忌

暖冬に越後山々縞模様

幸江さんの句にも言いましたが、「に」は大概「の」に置き替えた方が落ちつくことが多い。

暖冬の越後山々縞模様

冬小蜂刺すこともなく浮き止り

上五、「冬の蜂」でいい、と。座五は「浮き止り」でしょうか。ならば蜂のホバリング？

長崎桂子

枯芦の立尽くしゐて水浄し
初雪の窓に夕映鈴鹿嶺
数へ日に晴たる事や捗りて
戦なき七十年や初御空

数へ日に晴たる事や捗りて

この上五の「に」も「の」に替えたい。その上で、座五「捗りて」が唐突に過ぎる嫌いがありますので、

数へ日の晴天ことが捗りて

戦なき七十年経し初御空

「経し」が不要か、と。

戦なき七十年や初御空

斉藤裕子

環八より初富士くきり初墓参
置き忘れ慌てて戻る福袋
順繰りに子どもの抱負大旦
人生は試練試煉よ福笑

環八より初富士くきり初墓参

「くきり」は「区切り」から派生したことばのようで、強調して「くっきり」となったのでしょう。あるいは、「初富士」「初墓参」が盛り込み過ぎ。

初富士がくっきり環状八号線

置き忘れ慌てて戻る福袋

「慌てて戻る」は当りまえの措辞、無駄なことばです。

置き忘れかも福袋置いてある

順繰りに子等の抱負を大旦

「抱負を」は「聞きました」のことばを引き出すための「を」なんでしょうが、ない方がすっきりすると思います。

順繰りに子どもの抱負大旦

人生は試練試煉よ福笑

「練」は繊維に関わる漢字。「煉」は鉄鋼に関係した字。座五の「福笑」がなんともいいタイミングで坐っている。

須賀敏子

寒金柑そのままにして目白待つ
雪頻り駅伝男子風のごと
予報より雪多くなり都市悲鳴

病む母に赤き口紅寒卵

寒金柑そのままにして目白待つ

「寒金柑」は苦しい。そして「目白」は、歳時記により夏であったり秋だったり。要するに年中いる小鳥。だったら、

雪の金柑そのままにして目白待つ

この景は私の経験でもあります。

予報より雪多くなり都市悲鳴

句歌では、予想がはずれて困惑する、と言うよりも

大雪の予報当たりぬ都市悲鳴

としたほうが面百くなります。

佐藤喜孝

ねえさルはフレアー・スカート春の風
ハモニカに沢山の穴花粉症
まなじりといふもののあり烏引けり
観音の裳裾となりて春汀

てふてふのおぼれてゐるよ蒼空に

ねえさルはフレアー・スカート春の風

危ういところを詠んで、心中、春一番なら、なぞと不将なことを。

ハモニカに沢山の穴花粉症

「沢山の穴」をみつけてくるだけでも相当のちからなのですが、「花粉症」をとりあわせる。かなわんなア、と思ってしまうのです。

まなじりといふもののあり烏引けり

上五の一語で、懸命に飛翔する鳥のさまを具現して、何とまあ、と思ってしまうのです。一字一語もゆるがせにしない。

あをキーワード俳句辞典（こくーこけ）

こけし

遠雷や鳴子こけしが手足欲る　定梶じょう

此処

木洩れ日よここに在ますと吉祥草　赤座　典子
冬桜ここは黄泉かと見廻せり　田中　藤穂
青田波関東平野ここにあり　鎌倉喜久恵
樹海へはここより入る秋の夜　吉成美代子
花大根ここももうすぐマンションに　木村茂登子
半島もここが北端干布団　定梶じょう
置炬燵ここが主の席と決め　鈴木多枝子
青い芥子ここは西蔵空の中　森　理和
重力のここだけ強く糸瓜かな　定梶じょう
初霜やタイヤの跡もここで消ゆ　森山のりこ
枯葉鳴る今宵のラジオここまでに　長崎　桂子
ここにも筆あそこにも筆冬籠　堀内　一郎
ここからが真剣勝負鉦叩　斉藤　裕子
田中正造斃れしはここ蘆枯れる　竹内　弘子

孤高

孤高とはかくありたしや寒牡丹　芝　尚子
山百合の木陰孤高を守り咲く　渡邉　友七
群れゐても一花は孤高曼珠沙華　鈴木多枝子

ここかしこ

ここかしこ猫の構へる磯開き　鎌倉喜久恵
此処彼処便利過ぎ不安報恩構　長崎　桂子

ここち

氷穴や奈落の心地炎昼に　松本　米子
見るまへに疲るるここち菊花展　竹内　弘子
新緑の色に煽らるここちせり　山荘　慶子
ご無沙汰を詫びるここちの青田風　早崎　泰江
水底に札束のある風邪心地　堀内　一郎
増税と数多の声や風邪心地　須賀　敏子
表替して新涼の夕ごこち　木村茂登子
秋めくや備後表のふみごこち　田中　藤穂
蝉の眼の瑠璃色夜の爆心地　渡邉　友七
花三分なぜか華やぐ心地せる　森山のりこ

春の雪いつもの道に旅心地　東　亜未
新涼の踝たたたく心地よさ　赤座　典子
プラタナス短かく刈られ爆心地　大日向幸江
吊革の生あたたかき風邪心地　竹内　弘子
踏みしめし落葉ここちよき夏日　吉弘　恭子

心

風邪に寝て妻待つ心幼しや　渡邊　友七
窓外も心もまるく包む雪　松本　米子
蝌蚪の紐孤独の心癒されず　栢森　定男
叱ること心に言ひて苔の花　河合　笑子
灯をともす心の枯野敗けられぬ　田中　藤穂
除夜まうで心は母にしなだれて　篠田　純子
寄鍋や心のかげり消えゆけり　山荘　慶子
梅雨障子灯影に心ゆるませて　関口　ゆき
野葡萄や心は心を映すもの　森　理和
君の名を心に刻み初便り　王　岩
桜散る心ゆくまで歩をとどむ　早崎　泰江
眼にじかに心にじかに秋の空　高橋　信佑
朝寒や心病む人ドアに寄る　芝宮須磨子
料峭や孤独心をもてあます　森山のりこ
エホバ知る人の心の百日紅　東　亜未
研ぎ澄ます心と躰秋日和　須賀　敏子
初釜や心ひきしめ炭洗ふ　鎌倉喜久恵
かいつぶり心の通ふ沈黙も　須賀　敏子
少年の心波立つ鬼ヤンマ　大日向幸江
かく青き冬の草踏み心足る　定梶じょう
心なしか息も絶え絶え法師蝉　赤座　典子
ことのほか炭火に心よりにけり　堀内　一郎

こころ

田螺鳴くこころのどこかのぞかれて　後藤　志づ
能の面こころがはだかで歩き出す　松村美智子
墨をすりこころ鎮まる秋の昼　芝　尚子
藍を着て藍のこころになりすます　佐藤　喜孝
絵ごころの少し残りし葡萄かな　堀内　一郎
自句自選湯覚ごころのひとり言　関口　ゆき
落椿奢りごころをとき放ち　鎌倉喜久恵

あとがき

「あを」では大分前に竹内弘子さんと堀内一郎さんに選句欄をお願いした。少し間が開いてこの度、定梶じょうさんにお願ひした。間が開いた分、投句なされる方も戸惑はれるかと心配しましたが杞憂でした。「はしたて集」は活気のあるコーナーになり大喜びしてゐる。文法は勿論、句作の際の押すところ引くところの難しいところを実作に即してのお話、特に選者に賞められるとうれしいものだといふ事を忘れてゐました。

欄題の「はしたて」ですが、能登の枕詞がよいと閃いた。早速ネットで「能登・枕詞」と入力、ポチッと押すと「はしたて」とご託宣があった。縁ある言葉とおもひ決めた。「はしたて」の詳細は今号の「はしたて集」をお読み下さい。

題詠シリーズは順調?にすすみ今三月末締切りで「草」を募集してゐます。まだ間があるので頭の体操にと作ってみて下さい。

次回は「糸」です。

作りやすい漢字をと熟考の末の「糸」です。ご参加おまちしてます。締切五月末。

〈喜孝〉

二〇一六年三月号
発行日　三月七日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／松村美智子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。